



…生活保護されているような、教育にあまり熱心でない家庭。こういつた四つのグループを考えてみてこの間に子供を中心に考えてみますと、このいずれのコースをたどるにしても、子供はどこに行つても子供であり、発育して止まない子供であります。昨日の子供は今日の子供ではないと同様、今日の子供は明日の子供ではないのです。学校に到達するまでに常によい条件が与えられ、ば子供は幸福です。小学校は義務教育ですからどの子供も入る義務を持っています。この小学校に入つてくる時、子供は夫々の運命をになつて健康上から云えばその子が一〇となつていくかもしれないし、又一となつていくかもしれない。栄養や衛生的な条件が良く疾病から守られている者、いない者がある。又家庭からいつても、自ら母親の教育・性格によつて異つてくる。それらを一つの室に集めて教育する小学校の仕事は仲々むずかしいことと思ひます。我々幼児の保健にたずさわつてゐる者としてはそれ迄の条件を出来るだけよいものにしておいてやりたい。それを考えますと幼稚園に入れられる子と保育所にあずけられる子供によつて健康管理をするとき起つて来る問題がちがひ取扱ひもちがひが必要があるものです。例へばおべんとうのおかずにしても幼稚園なら、もつとこんな物を与える方が理想です……と云つてやればよいのですが、これに対し保育所では直接に与えてやらなければならぬ、又例へば、子供が急に伝染病

にかかつた場合、幼稚園ならば、時間を問わず家に帰せばそれで済みますが、保育所の方はそういうわけに行かず、保育所の中で始末するようにならなくてはなりません。結局保育所であれば主として家庭をひき上げて行く力をもつて居り、幼稚園は家と相携へて行く。然しどこまでいつても発育する主体は子供であり、その発育を助長する環境的な要素が欠けると子供は不幸であります。与え方、取扱ひ方は異つてもいつも健康な子供である様に我々保育者はそれぞれの立場から努力していくことが大切です。発育は年齢によつて交つてくる。それを左右するものは養護条件・栄養条件であり、体質等も各時期によつてちがつてくる。このように異つた体質の者が小学校に入つて行くに際して、複雑な問題をもつて行くことを考えたいと思ひます。その際発育・養護・栄養・体質などが組合わさつて子供という個人を作つてゐるから、問題は非常に複雑ですが、身体的なこうした要素を各分野の保育者が一環して理解することが望まれるわけがあります。

○家庭と幼稚園と小学校

文 部 省 武 田 一 郎

武田氏—すでにお三人のかたがたが御発表されましたので、もう私の申すことはないように思われますが、一つの問題をいろいろの立場から申上げるのがシンポジウムのねらいでしょうから、一応私の口を通していわせていただくことにしましょう。

幼児教育の立場から、家庭と幼稚園と小学校は、どのような関連を保つべきかと申しますならば、私は一言に、それら三者の理解あ

る協力とその理解ある協力が実現されるような組織や、制度を確立することにありと申したいと思えます。いつたい今日、幼稚園教育の眞の目的が、家庭によく理解されているでしょうか、また、同じ学校の系統の中に編入されたといふながら、小学校の先生がたに、果してどの程度に幼稚園が理解されているでしょうか。それどころか、幼稚園に勤めている先生がたの中にさえ、ほんとうに幼稚園を理解していない人がありはせんでしょうか。自分の学校に幼稚園が併設してありながら、その先生の口から、『幼稚園から来た子供は扱いにくくてこまる。』という不平が出るような例もあるという時代であります。そこでまず、幼稚園は何をするところか、幼稚園教育はなぜ必要かということ、関係各機関を動員して、一日も早く、学校の一般の教師を始め、世間の人々に理解してもらつたような運動を展開することが第一に必要だと思ひます。

幼稚園から来た子供は、それだけ、知的にも社会的にも、家庭から来た子供よりは、一般に進んでいるわけですから、その子供を、一般の子供と同じように指導しようとするところに無理が生ずるのであります。つまり小学校がわで、どの子供にも同じように、学習指導要領の線に沿つて、画一に指導しようとするから、幼稚園から来た子供の中には、いわばかくかくして、不適応の現象を示すということが多いのでしよう。ここは、幼稚園と小学校との連絡、中でもカリキュラムの関連を考慮する必要があります。小学校の先生はもつともつと幼稚園の教育に理解をもたねばなりません、同様に、幼稚園の先生ももつともつと学校、中でも低学年のカリキュラムを理解しなければなりません。このような学校間の無理解から生ずる問題は、小学校と中学校の間にもあります。中学校では、小学校から来た子供を、みな一様に扱おうとして、いろいろなトラブルを示して

おります。今日の教育は、子供のひとりびとりに応じたカリキュラムや指導法をもたなければなりません。これがためには、一組に五十人も六十人もいたのでは、とうていこのような扱いをすることができません。そこで学校の編制基準として、一学級の子供の数を四十人以下にする必要があるわけがあります。

とにかく、このような理解を相互にもつためには、それぞれの関係者が話し合うこと、互に参観することなどがもつともたいせつであります。父兄の理解を得るためには、PTAを通じて行つたことがもつとも有効なしかたの一つでありましよう。

制度の点につきましては、先刻小林先生から御提案がありましたことに、私も大賛成です、少くとも、全国の小学校には、五歳児を收容する幼稚園が設けられるようにしたいものです、しかも、それが今日多く見るように、校舎だけ同じでも、教育の内容が全然無関係であつたり、それぞれの教師が全然没交渉であるということでは困ります。アメリカの第二次教育使節団の報告書にもあるとおり、幼稚園の課程が、眞に、小学校の教育計画と有機的連関をもつた一環として計画されなければなりません。といふことは、けつして、幼稚園の教育を、旧い小学校でやつていたように、教科本位でぐんぐんつめこむという意味ではありません。ともす、ると幼稚園が学校系統に編入され、従来の保母が教諭と言われるようになったといふので、幼児の教育が、かたくるしい教料的な教育になつたりしたら、それこそ、とんでもないことです。それどころか、むしろ、従来の低学年の教育法を、もつともつと幼稚園的にきりかえなければならぬと思ひます。

なお組織や制度の面では、幼稚園から小学一、二年ぐらゐまでをひき続いて担当するような方法を考えるとか、それがためには、幼稚園教育の養成施設をもつと充実するとか、たとえ義務教育でなく

ても、幼稚園教員の待遇を改善するということが急務であります。子供が集団生活を開始する年齢になつたら、なるべく早くそのような環境において教育することの必要は、もはや、疑う餘地のない原理となつています。この自明の原理が理解されその時代の心身発達に應じた教育ができるように、家庭、幼稚園、小学校の間に緊密な協力がつくりられ、幼児の幸福のために、幼稚園教育が健全に発達することを祈つてやみません。

協 議

南出信一氏（滋賀県守山幼稚園）―小林先生におうかがい致します。

保育効果の判定について幼稚園から小学校へ入つて来た当初困ると云つて居られるのですが、幼稚園を出たものと出ないものと、如何に差があるかということを見ることは意義があると思います。入学当初だけでなく、一ヶ年なり或は六ヶ年間の教育の結果、如何に差があらわれるかを見るとよくわかるのではないかと思います。小学校の教育を受けて行くに従つて外面的に差が出て来る。一つの尺度によつて、はかることは容易に出来ないことであろうと思ひますが。

小林操氏―結構な御意見と思ひます。私も同感です。小学校六ヶ年を通して、どのような効果が現われてくるか、はつきりした科学的な資料がほしいと思ひますが、具体的にどのように評価して行くか、これにはつきりしていませんので、徐々に研究して行くことが必要で幼稚園へ行つた子供は困るというのは、ただ何となく困るというのではないかと思ひます。私のところでも幼稚園から来た子供は

かりを担当した先生は、初めはやはり困ると訴えていたのですが二、三学期になると他のクラスよりよかつたのです。幼稚園から来た一人一人の生活が充分のみ込めていないために困る、自分のもつていものさしが科学的でないので困るのでありましょう。

徳琴久氏（東京都番町幼稚園）―小林先生に、幼稚園の認識を深めたいとすると小学校に赴任する先生は、実習中に出来るだけ実際に幼稚園を経験する必要があります。幼稚園の先生も小学校を経験する事が必要です。また小学校も、幼稚園も保育所も正しい両親教育をすべきで、具体的な問題をおき、それに対する認識を深めることが必要と思ひます。

小林氏―お互に同感です。

上村哲彌氏（日本女子大学）―皆の先生方にかゝることでありますが……武田先生にお話をおうかがいしたい。

新教育の反省として、反動になるのはどこにもある共通な過程であります。その反動の圧力で、地方は知らないが東京では幼稚園はよい私立の小学校へ行く準備をして行く手段と考えられることが問題であります。こうなると幼稚園でもその保育の本質がぐらつて来るわけです。――正しい両親教育をしなくてはならないと思ひますが――。

武田氏―先程小川先生の御発表の中に、お話ありましたが、私もあちらでP・T・Aの会合に出てみました。P・T・Aの会費は一年間に二十セント位。むこうのP・T・Aは希望者だけで、全部が入るのではなく自由であり、又家庭では夫婦は各々別の資格でやつて居ります。日本では主人が出られない場合妻が代理で出るという工合ですが、そんな事は全くない。ある処では学級の子の半分が入つて居る。一年間の会費が七十セントで夫婦共に入れば五十セント

というようにしているものもある。プログラムとしては、専門家―児童心理学者など―の講義を二週間位続けてきくということをしている。この際日本では、P・T・Aの会費から出すが、アメリカではその場合で会費を出します。ぜひ上村先生のようなお話をききたいとしたら、内容をきめて自分達で会費を出しているわけです。会員は全員ではありませんから会員数は少ないのですが、非常に熱心で積極的であります。日本では子供が学校に入ったということとP・T・Aに入ったということは同じ意識でP・T・Aに参加することになります。これはいけないと思います。P・T・Aの会員には、入会書のようなものを取りよく自覚して入るようになる方がよいと思います。

及川ふみ氏(茶の水女子大附属幼稚園)―鈴木先生に。

保育所では、小学校に行っている子が学校から帰って来て保育所に来るのはどうしているのでしょうか。

鈴木氏―入りたいのですが公立保育園では中々あずかれない。私のところでは、夏の頃まではあずかつて欲しいという子供はあずかつて居ります。一、二年の学 指導は必ず保育所に来ることとしていました。母親のかえるまでの保護、母親にいだかれぬ淋しさを補って普通の家のようにあずかっています。九人おりますが学校から帰って来ると保育園で学習しています。そして帰ると学校での給食の他に保育所の給食をいただき、更にミルクとかおやつまでちやうだいと云う有様です。

及川氏―保育所の年齢を低いところにおきたいという希望と同時に、小学校の低学年の児童に対しても働く母親をもつ場合、保育所の指導的地位にいる人に特に指導を要望したいと思います。保母の数の不足なども考えていただきたい。

鈴木氏―現在とても過労になるので、小学生より幼児の方を保育せねばならず、公のものでは出来ないで困つて居ります。母親が九時、十時頃まで帰らないところでは不良化の問題も考慮しなければなりません。――

荻司雅子氏(広島教育大)―武田先生にお尋ねしたい。

幼稚園から来た子は困るということを私は考えさせられました。アメリカでも私、フザンナフローという人の書いたアメリカに於ける幼稚園の発達史を読んで見ると、その中にも今日問題に出た幼稚園から来たものは困ると書いてあり、小学校の校長さんあてに統計をとらせたところ非常によい結果が出て、そのことから公立の幼稚園は数が多くなつたという。日本は過渡期にある。困るというのはどうか、それをくわしく調査し、統計というものが充分出てから公立幼稚園を設立すべきであると思います。

武田氏―まさにその通りです。これが出来るように進めて行きたい。幼稚園は少くとも五歳児はできるだけ入れてほしいと地方の教育委員会に望んで着々とすすめています。

司 登 ―それでは、これから討論も盛んになろうとしているのですが、時間もすでに一時間以上オーバーしているので残念ですがこれで終りたいと思います。